

大倉邦彥監修

躬行

皇紀二千六百二年

十二月號



明治天皇御製

を、しくも

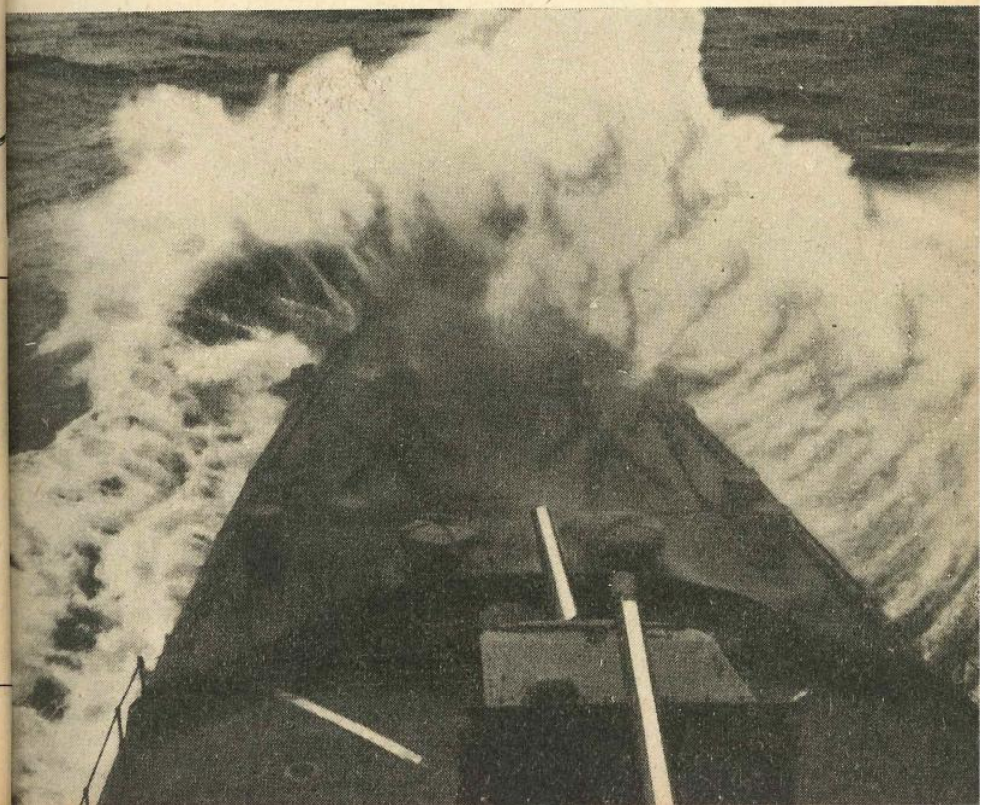
連りきつる

あた船を

うち碎きけり

わがいくさびと

北洋を征するが精銳(海軍省検閲)



感

人口過剩問題を取上げてゐた人たちは、人口増殖問題に轉向し、利潤目的の産業は、國家目的へと切換へられ、共產主義讚同者は、國家主義の指導者となり

濟ました。

想

掌を返したやうな轉身が何處迄本物であるか疑はしい。保身術と便乘主義は、人を晦ますことが巧みであることを忘れてはならぬ。

○ 上に立つ人、導く人、先に立つ人々は、先づ垂範者として躬行しなければならぬ。かうして一般は自ら従いて來る。時局即應反省自覺は、先づ足許から。



十二月號目次

御製と寫眞

感想	一
大詔に應へまつる心	二
御苦勞さん	六
日本の生活	七
幼學綱要頒賜六十年	八
初冬雜詠	九
創意	一〇
器と中味	二
神社巡り	三
隣組風景	三
北氷洋の島より	四
一家僧族	五
大倉山だより	五

編輯後記



大詔に應へまつる心

大東亞戦争が勃發した當時、國民の心持は、一時に明るくなつて、これからいよく米英を打ちのめしてやらう。八紘爲宇の精神に基づいて、大東亞の建直しをしなければならぬといふことを、心に決めたのであつた。所謂一億一心堅き團結のもとに、長期戦を勝抜く體制を取つて進んで來たのである。この戦争には、絶対に媾和といふものはない。勝抜いて敵の兜を取らなければ、鉾を収めないといふのが、この度の戦争の特質である。こゝまで來るには、なか／＼大變な道行きをして來たことを忘れてはならないのである。といふのは、明治以來長い間政治も、經濟も、學問乃至は思想も、悉く米英に範を取り、米英の顔色を窺ひ、米英に追隨して來ただけに、彼等に無理をいはれても、妥協的態度を取つて弱腰になつてゐたことが續いて居つたから、政治の長老も、經濟社會の空氣も、學者思想家も對米英戦争には躊躇の色が見えてゐないではなかつた。

だけれども、圖に乗つた米英の威嚇的態度に對して、日本魂はつひに勘忍袋の緒を切つて起上つたのである。決意を以て、國民は悉く皆をあげ、腕を撫して起つたのである。

この大詔は、數ある詔勅の中にも、有史以來の大詔であり、全世界を震動せしめたほどの霹靂であつた。詔書の中に、米英を撃たなければ、東洋平和に關する我が國積年の努力は水泡に歸するばかりでなく、我が國自身の存立が累卵の危さにまで持ち來たされてゐたから、神國日本の永遠のために、起たなければならぬと、事細かにその理由と成行きを昭示遊ばされたことを拜しては、陛下が深く御宸襟を惱まし給うたことが拜察されて、恐れ多い極みである。

畏くも陛下が嚴然として宣戰の御決斷を下し給うたことは、恰度、神代の昔、荒ぶる神の暴狀に對して、神德限りなく尊き天照大神が蹶然起たせられて、御武裝も凛々しく武裝せられて、大地を力強く踏みならし、障礙となる物を沫雪あはゆきのやうに蹴散らして、御勢ひ烈しく立向はせられた雄叫びにも似通つて居る。

大詔には、

事既ニ此ニ至ル帝國ハ今ヤ自存自衛ノタメ蹶然起ツテ一切ノ障礙ヲ破碎スルノ外ナキナリ

と仰せられ、陸海の將兵は必勝の信念を以て敵を撃滅し、官吏は一人残らずその務めに勵み、一般國民はその持場持場で全力を擧げて職務を果し、國家の總力を傾倒して勝抜くために、少しの緩みや手違ひがないやうにしなければならぬ、と仰せられて居る。それをば、うかく／＼して居つたり、緊張しなかつたり、我儘なことなど考へて、時局に添はないやうなことがあつたならば、不忠の臣といはなければならぬのである。

かやうな 陛下の大決断を以て仰せ出された詔勅は、實に神の御言葉である。即ち、詔勅の初めに、天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國天皇ハ昭ニ忠誠勇武ナル汝有衆ニ示スと儼然とした御言葉を下されてゐるのである。また最後には、

皇祖皇宗ノ神靈上ニ在リ

と仰せられて居る。かういふ御言葉は、實にこの詔勅が、絶対至上の神よりの發露であり、神國日本の中心である現御神、即ち天照大神そのまゝの天皇の御稜威より發せられたことを意味するのである。古人の歌に、おほきみ天皇は神にしますぞ天皇の勅としいはばかりこみまつれ、とあるのも、このことを歌つたものである。この意味が、本當によく全國民に解れば、神國日本といふことの意味が解る譯である。そこから、天佑といふことが解り、皇祖皇宗の神靈が常に皇國を見護つておいでになることも解り、國民は一億一心悉く、現御神としての天皇に歸一し奉らなければならぬことが明かになる筈である。

この深く尊い意味から、詔勅は絶対至上の命令であり、無限の力である。この絶対力が歴史の心棒となつて今日に及んで來た譯である。將來限りなく伸びて行く命の源もそこにある。尤も過去長い歴史の間には、時々、誤れる思想、歪んだ傾向がないではなかつたが、左様な時には、必ず詔勅が下されて矯め直されて來たのである。遠くは神勅より、歴代天皇の御詔勅は悉く一貫して、日本の命となつて流れてゐる。外國のやうに、たゞ空に神の聲とか、正義とかいつても、それは人間同士の考へたことであつて、時代によつて、人によつて變つた解釋を持つやうなものとは、全く異つてゐる。さういふ譯で、政治の根本たる憲法にしても、西洋の憲法は人民たちが持つた精神である。けれども、日本の憲法は、皇祖皇宗の御思召の結晶である。

かやうにして、我が國では一切萬事が、天皇の御稜威にその本を發して動いて行く譯であるから、そのことが徹底すれば國體が明徴になつて來るし、詔勅が絶対至高のものであるといふことが解るのである。だから、昔から詔を承けては必ず謹むといつて、大御言葉に隨順を誓ひ、それを實踐することが臣道の根本となつて居る。ただ恭々しく詔書を捧讀するだけで、魂を湧かし、實行に移らないやうでは、未だ國體を理解してゐないといふことを恥ぢなければならぬ。どうも、國民全體に下し賜うた詔勅であるから、一億分の一だけの責任を感じてゐるといつたやうな傾きがあるのではなからうか。

國民の一人々々が詔勅を自分に戴いたものであると知つてこそ、始めて、詔勅の御教への實踐が出来るのである。職域奉公、臣道實踐を通して 陛下の御思召にお應へする道もそこに開けるのである。

昔、橘曙覽といふ人が、臣道實踐といふことについて、ものを書くのも君の爲め、田を耕すも君の爲め、商ひするのも君の爲め、病を癒すも君の爲め、何事をするもさう思うてやらなければならぬと強調して居るのは、まことによく言表はした言葉である。學生が勉強するのも、工場で働くのも、田園に耕すのも、すべて詔勅にお應へすることである。いやな氣持で仕事をしたり、慾につられて働いたりすることなしに、天皇の御爲め、國の爲めになるやうにと心掛けて働けば、萬人仕事は違つても、目標はたゞ一つであるから、それで始めて一億一心となつて、醜い摩擦や争ひも起らない譯である。

かうして協力一致の精神によつて、舉國一體、戦争必勝、建設必成が出来るのである。然るに、過去長い間の

傳統習慣が取れ切らないで、勉強するのは將來の立身出世の爲め、仕事をするのは生活の爲め、商ひするのは儲けの爲めと考へたり、或は初めに述べたやうな、米英思想の殘滓が洗ひ落せなかつたりする人がないとも限らない。若しそんなことがあるならば、それこそ、獅子身中の蟲となつて、知らず識らずの間に日本の推進力を阻み天皇の不忠の臣となるのである。よく胸に手を當てて反省し、誤つた考へを矯正し、方向の轉換をして、國家目的の一途に勇往邁進することが、大詔を奉戴する精神でなければならぬ。

御苦勞さん

東京の郊外電車の某驛の構内に、黄菊白菊が、花瓶に目のさめるやうにさゝれて、そのわきに紙が下げられ、筆で次のやうな言葉が丁寧に認められてあつた。

「今日も一日御苦勞さん」

電車に乗る人や降る人がかなり多い驛であるが、それ等の人々が、改札口に列を作つて、立ち止つてゐる時などには、その花とその言葉とを見くらべては、思はず微笑したり首肯したりしてゐる。忙しく階段を下りて來て、白い紙に書かれ

た文字をながし目に見て、無表情でそのままさつさと足早やに行つてしまふ者もあるし、大きな鞆を下げて悠々とその前に立ち止り、何回も口の中でその言葉を繰り返して、一寸おじぎをしてゆく者もあつた。

彼は産業戦士であつた。残業で十時十一時になることも珍しくない彼のこの頃だつた。身體も神經も疲れ切つてゐる。下宿に歸つても暗い室が待つてゐるばかりで、そこにあたゝかい言葉をかけてくれる人もゐなかつた。さうした彼の生活にとつて、「今日も一日御苦勞さん」なるその一言は、それが紙にかゝれた言葉であつても、身にしみて有難かつた。

「感謝してくれてる人がある。」ことを切實に感じさせるものがあつた。その途端國で百姓をしてゐる兩親のことを思うた。國民學校に通つてゐる妹や弟のことを思つた。そして産業戦士として皇國のために働いてゐる彼の現在の生活が有難くかへりみられた。

お互に日本國民としてのつとめをつくしてゐるのだ。御苦勞様も、お疲れさまも、特に言ふ必要はないと言つてしまへばそれまでだが、辛い苦しいところを道樂でも趣味でもなく、皇國のために捧げ盡す一途の眞心で押し通してゆく氣持、それを「御苦勞さん」と慰めてくれる思ひやりが彼には有難かつた。



日本の生活

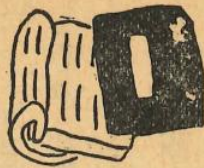
「山海の珍味と云ふのは、蕨、梅干、水母である。國土の菓子と云ふ

ことであらうが、多くの人は、この日本的な淡泊な生活を忘れてしまつた。物の豊富に慣れて、本來の山海の珍味、國土の菓子を見失つてしまつたのである。

してゐないにしても、勿體ないと云ふ心を忘れて物の生命を殺してゐたことが多い。簡素淡泊な美しい日本の發

のは柿栗の類である。又世間で年中の五節句、煤拂ひ、その他正月のおせちと云つて、その時の料理には多くは芋、人蔘、牛蒡などの野菜の煮物に、田作たぢやくのなまぐさを以て祝儀とする。これで山海の珍味は備つてゐる」と昔の人は書き残してゐる。我の先祖の行つた日本的な簡素な奥ゆかしい生活振りが偲ばれてなつかしい。今も尙地方にはこのやうな美

生活程度の切下げの問題が、いろいろと論議されるが、それはわれわれの生活に知らずくの内についてゐた物質主義、享樂主義のこけをとりに去ることに外ならない。程度を低くするのではなく、本來の日本人の生活に歸ることである。これまでの生活は決して美しいものではなかつた。只體裁と浪費のかたまりにすぎなかつたことを自覺すれば良い。假とが必要である。



幼學綱要 頒賜六十年

五箇條の御誓文に「智識ヲ世界ニ求メ」と仰せられたのは、是によつて大いに皇基を振起し給はんとの

明治天皇の畏き叡慮であつた。然るに滔々たる西洋文物の流入は動もすれば文明開化の美名の下に固有の日本精神を蔽ひ隠さんばかりの勢と化した。その禍害の恐るべきことを豫見遊ばされた天皇は明治十二年長くもこの時弊を匡正するには、先づ幼年無垢の心に忠孝仁義の大本を植ゑつけるに如くはなしと思召され、幼童のために一部の教訓書を編纂すべきことを侍講元田永孚ながさねに命じ給うた。この有難き聖旨を奉じ、三年餘の時日を費して明治廿五年十二月宛戒しとのが「幼學綱要」でなく、小學校教員の講習用本に使用したり、巡查の検定試験の指定参考書とした府縣もあつた。近衛都督小松宮彰仁親王が部下將校のために、幼學綱要下賜方を徳大寺宮内卿に御幹旋になられ、川村海軍卿が兵學校生徒へ授讀賞賜のため屢、その下賜を願ひ出た如きも記憶されなければならぬことである。民間の各種の教化團體や宗教團體も亦所屬の會員信徒等の教導のために本書を用ひたものが少くない。又この書の版權が初め、宮内省に屬してゐて一般國民には入手が困難であつたため、縣令や書店よりその翻刻を依頼する者が多く、明治十八年までにその數凡そ十件に達してゐる。國民の奉體の熱意を物語るものである。

要』七卷である。その内容は孝行・忠節等の二十の徳目を列ね、初めにその大旨を説き、次に四書五經から適切な格言數句を引き、更に和漢の例話數條を附して讀物としてその形を整へてある。本書が完成するや、

天皇は各宮方を始め奉り重臣顯官等に之を賜つた。又特に幼學綱要頒賜の勅諭をお下しになり、編纂頒賜の聖旨を昭示し給うたのである。更に又、學習院は勿論全國の師範學校・中等學校・小學校等にも修身科の教授参考書として本書を下賜遊ばされたのみならず、毎晩夕の御膳が御濟み遊ばすと、宮中奉仕の女官達に對して天皇親ら本書を講じ給ひ、又皇太子明宮嘉仁親王はるのみやのために本書を御進講申し上げべきことを湯本武比古に命ぜられ、或は毎月宮内省を通じて頒賜せられる幼學綱要の部數やその頒賜先の名を奏上すべき旨を規定遊ばされるなど、數、叡慮を勞し給うたのである。

綱根は野望看體に感歎しこれに捧體で力秘書頒賜の目的は或は一時達せられるかに見えたが、所謂鹿鳴館時代の出現は漸く本書を國民の腦裏より忘れしめるに至り、遂に教育勅語の渙發となつたのである。



初冬雜詠

負けんとはつゆ思はねどかくばかり
雄々しきものかやまとみたみは
いくたびか幼き日よりきかされし
忠義といふを今ぞ目にみる
山里は書靜かなり冬の陽に
八ツ手の花の白くこぼれて
大御代を祝ぐかとはばかりみのりたる
三百年の背戸の柿の木
孫のため乾柿つくるおほはしの
膝にあかるし冬の陽ざしは

幼學綱要は漢籍や文語文に縁の遠くなく、現代の青少年には難解な所も相當多い。然し幸ひなことには、口語文に全譯したものや難解な語句に註釋を施したものが澤山出版されてゐるので、それらを参考すれば誰でも容易く讀むことが出来る。若し原本のままに讀みたい者は岩波文庫本によるのが便利であらう。

先には學制頒布七十年の式典が擧げられたが、奇しくも本月は、幼學綱要が頒賜されてから滿六十年になる。大東亞戦争一周年を迎へて國民の道義昂揚がいよいよ強く叫ばれるに至つた。一億同胞に臣民の道の指針として敢てこの書の一讀をお奨めしたい。



意

創

「人手不足の折柄、不行届きの點は御容赦願ひます」といふ紙札が、食堂、喫

茶店などにはよく貼り出されてゐるのが目につく。時節柄どこでも人手が足りないときだから、それで不行届きがあつてはどの心から、このピラを貼り出した心遣ひは、大へん結構である。ところが、或る日のことお茶を喫まうと、とある喫茶店に入り、求めた食券を持つて、腰を下して待つことしばしに及んだが、給仕の女の子はなか／＼注文を伺ひにやつて來ない。偶々一人私のうしろに



器と中味

吉田の羊羹好きは友達仲間でも有名なものだった。その彼が出征した。

友達仲間は罐入りの羊羹を慰問としてしばしば送つた。すると戦地からの吉田の禮手紙に

「羊羹を毎度ありがたう、だが近頃では仲間が誰れも彼れもみな羊羹を送つてくるので、好きは好きなんだがいささか閉口してゐる。それに戦地の酒保でも羊羹は賣つてゐるんでね、今度はチト變つた物が欲しいなあ」と書つてあつた。「相變らず我が儘な奴だなあ」と言ひながらも、別段腹も立てず、今度は何を送つてやらうかと。あれこれと吉田がよろこびさうな品物を頭にうかべるのだつた。

ところがその後暫くして吉田が名譽の負傷をして内地還送となり、江戸川ペリの高臺にある某陸軍病院に收容された

券を差出したところ、返事のへの字もない上に、スルリと通り抜けてしまつた。目の前に食券を差出してのことだつたから、よもや氣づかなかつた譯はなからうに、これは餘りにも素ツ氣なくうるさいですといはぬばかりの仕打である。一寸お待ち下さいとか、只今伺ひますとか、何とか一言挨拶でもあれば、食券を差出した私の手はまごつかずに濟んだだらうし、氣持もいら立たずに濟んだだらうに。貼り札の意味は、手不足だから不行届は當り前だとして、それを勘辨して貰はふためのものではあるまい。至らざるを相濟まぬと思ふ心が貼り札の意味であらう。

この戦時下、到る處人手も資材も不足してゐる。だからといつて不行戦地ならともかく、内地の陸軍病院では、さう／＼羊羹などは食へない。もともと羊羹の好きな彼である。さきに戦地から羊羹を斷つたことなどケロリと忘れて、「久しぶりで羊羹を食いたいのだなア。」と手紙で真情を吐露したものだ。「それ見たことか戦地にある時は、もういらんなどいつてゐた癖に、勝手な奴だなあ」といひながらもそこは友達である。苦勞して羊羹を三本ばかり手に入れ、生れたばかりの赤坊と若き妻とを同伴して吉田を陸軍病院に訪ねた。そして病室で

しばらく快活な吉田の武勇談にきゝほれてゐたが、思ひ出したやうに慌てゝ友達はおしめの入れてあるらしい包みの中をゴソ／＼と手で探しはぢめた。

「これだ、これだ、あつた、あつた。」とおしめの中から叮嚀につままれてゐた羊羹を三本出し、

「これには大分苦勞をした、食へよ食へよ」といふのである。さすがの吉田もオシメの中からとり出すところを現在見てゐたのである。包み紙に包んであるから別に汚くはない筈なんだが、手を出しかねてゐると、

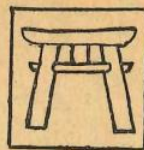
届では濟まされない。その不足を補つてゆくだけのめい／＼の工夫創意と努力が切實に求められてゐるのである。喫茶店のサーヴィスなどの小さいことなら何もさう取上げていふほどのこともなからうが、戦争遂行に、ぢかにひゞく生産増強の問題となると、事は甚だ重大である。いろいろなもの不足だから、不行届きで、御容赦も止むを得ぬといふ氣で居たのでは、戦争を勝抜く譯には參らぬ。人手の不足も、資材の不十分も、その他の條件もすべてこれに打克つて、立派な増産の成績をあげなければ、前線將兵の奮戦に差障りが起るのである。勝抜くための工夫創意と眞剣な努力に、お互ひもつともつと拍車をかけようではないか。

シメの中に入れて來たんだよ」と友は言ひながら、おしめをひらいた。そこには小さな闇をくぐつてきたらしい三本の羊羹が、初冬の陽をあびてちんまりと並んでゐる。

薄いパラヒン紙に包まれた黒い羊羹だが、方々持ち歩いてゐる中に水分が滲み出て、包み紙がベツトリとはりついたやうになつてゐる。さすがの吉田も友達の好意は嬉しかつたが、遂に食ふ氣になれなかつたといふ。

おしめの中に包まれてゐようが、羊羹は羊羹で、羊羹それ自體には何の變りもあるはずはないわけであるが、一寸、食ふ氣になれない。といふところに、形式と内容、器と中味との關係がそこにある。

まづ形式、作法を整へることであるだが、ともすると、内容々々と言つて形式をおろそかにする向もあるけれども、内容は形式によつて、初めてその精神が整へられ正されるのである。また形式にまごころこめることによつて、内容がいよいよ純化され、統一され、充實されるのである。



神社巡り (五)

國幣小社忌宮神社は、下關市長府町に御鎮座、仲哀天皇、神功皇后、應神天皇の三柱の神を併せて一座を祀る。十二月十五日を例祭日とする。

當社は、仲哀天皇、熊襲御征討の際行宮として七年間御駐蹕遊ばされた宮址で、天皇の崩御後、皇后は當社正面土肥山の麓に假に御尊骸を葬り奉り、新羅より御凱旋の後齋宮を興して御親祭遊ばされたのが當社の創祀であるといふ。聖武天皇の御代に神功皇后、應神天皇を合祀し奉る。

往古より皇室の御尊崇厚く、武門の崇敬も亦深かった。恒例の大祭の他、數方庭祭(八月)、奉射祭(二月)、御齋祭(十二月)等の特殊はれる。新羅征討の出陣、凱旋式を祝した行事であるといはれ、町民、毎夕、幟を立て切籠を掲げ、笛、鉦、鼓等を囃しつゝ社頭に参り、踊り舞ふ勇壯典雅な神事である。

御齋祭は、例祭の直前九日間に互つて行はれる重要な神事で、この期間嚴重な潔齋を爲すと共に神御衣、神寶の調進、奉納が行はれる。先づ鳥居前に、諸人参入禁止の標木を建て、神社の周圍には注連繩を張り、神職一同参籠し、夜中燈火を用ひず、音響を停止し、氏子地内も一切の歌舞音曲裁縫洗濯を行はず、夜は各戸門を鎖し、火光の漏洩を防ぐ。かゝる中に神事は進行し、十五日朝に至つて神事を畢り、四圍の注連繩及び標木を撤して、一般人の参拜を許すのである。



隣組風景

東京市の野菜配給登録制度もいよく實施され、八百屋がすべて野菜を隣組單位に配給することになった。これがうまくゆけば、野菜を求めるときに長い行列をつくり、長時間立つて待たなければならぬ時間のムダや闇の問題でなく、やがて全國大都市にこの方法が布かれることになるであらう。それについて町の臨時常會が開かれた。いろいろな報告や話し合があつた末に、「では、八百屋さんの所屬も決定いたしましたから、それ〴〵御紹介をいたします。」と町會長さんが言ふと、組長さんの一人が、

「あゝ一寸待つて下さい。何しろ今までが今ままで多少とも八百屋に對しては苦い經驗をおもちの方もありになることと存じます。實は昨日、ある八百屋で柿を買つたのですが、八百屋が柿を目方にかけて差し出したからおいくらですか、ときくと、一圓ですといふ。あゝさうですかと財布の中から五十錢札二枚を出し

いと感違ひして、益、思ひ上る者が出ることも限らないといふと町會長さんは「いや、それは安心です。さしあたり六ヶ月たてば交代で成績のわるい者はやめて貰ふことになつてゐます。兎も角、八百屋ばかりでなく、商人一般の方に時局をよく認識していただいて、職業を通じて、この上とも御奉公のまことをつくしていただくたいものです。それではこのことを誓つていただくとして八百屋さんを御紹介いたします。」と言つた。

隣組長さんは、生々しい現實の問題だけに、どんな八百屋さんが私の隣組にお嫁に来て下さるか、と今度は、先ほどの話などは、ケロリと忘れてしまつたやうに、和やかにこゝろして待つてゐる。やがて各隣組に八百屋さんがそれ〴〵紹介された。「何分ともよろしく願ひします。」と組長さんが言へば、「今まで、いろ〴〵不行届の點も多かつたと思ひます。これから一層氣をつけます。わるいところはどし〴〵仰言つて下さい。出来るだけ御役に立つやうに努力いたします。よろしく御願ひ申します」とかう八百屋さんにはれてみれば、いまままでのことをあれこれとならべたて、

か、といふ。へんなことを言ふなあ、今しがたはけに一圓だと言つた筈だ。これではいけないんですか、といふと、一圓十錢のたゞきです、と平然と答へる。秤をまちがへたら、まちがへたことはればよろしいのに、これではこちらが財布から金を出してゐる間に、十錢のヤミを考へたとしか思へません。」と一人が鬱憤を吐けば、「いや、八百屋の中には、實にヒドイのがあります。昨日も、店に青物が並べてありましたが、これ、戴けませんでせうか、ときくと今時分来たつてダメですよ、明日の朝来て下さい。」と外ツぽを向いたまゝ、突けんどんにつばなされました。あすの朝何時頃伺つたらよろしいでせうか、とおそる〴〵たづねると、それは何時か起きてみなければわかりませんよ、とかうなんです。一體、何のためにこの八百屋さんにかうまで虐待されるのか、何かウラミでもあるのかと思つてみましたが、そんなことは一向なし、意地のわるい八百屋さんがほんとうにうらめしくなりました。」と口惜しさうにいふ者もある。商人の方にも非常時局が分つた本當によい人もあるが、中にはトンダ考へ違ひをして思ひ上つてゐる者もある。隣組で所屬の八百屋に一切過去はさらりと水に流した。さつぱりした氣持になつて、お互ひにうちとけたことであつた。

そこには職業熱心に、皇國のため人のため骨惜しみをしないでまごころをつくさうとの意氣込が無言のうちにお互ひの間に現れてゐる。そこで町會長さんは「皆んな仲よく渾然一體になつて各自その職域にまごころをつくしませう、この度交換船で國に歸つた元米大使グループは、いままでも日本内部の崩壊を目論んで、いろいろ經濟壓迫や思想戦などで劃策して見たが、日本人は、そんな生やさしいことではビクともしない。いざとなると日頃仲のわるい者もすつかり打とけて祖國のために一つ心になる。武力戦で彼等をやつつけられともかく、内部崩壊などは思ひもよらない。アメリカは大きな誤算をしてゐた。」と云つたさうです。大いに仲のよいところを英米にも見せつけてやりませう。この上とも日本人の心意氣で協力いたしませう。作る人も賣る人も買ふ人も、皇國のために、まごころのつくし合をいたしませう。」と言つた。さうしてお互ひは私利私欲を出来るだけなくして、元氣で明るく助け合つてこの長期戦を乗り切りませうと誓ひ合つた。

北氷洋の島より

前略 粉のやうなこまかい雪が夜となく晝となく降りつゞいてゐます。ゴーツといふ風の音の合間に、北海の荒磯にくだける浪の音が、吠えるやうに聞えて來ます。

島に來た頃は、山の頂きには萬年雪、谷間には殘雪があり、花菖蒲、黒百合、鈴蘭、それに名も知れない高山植物のやうな花が一面に咲いてゐました。その山の傾斜に立つて、はるかに水平線の彼方日本の方向にむかつて「オーイ」と聲限り呼んだこともありました。北の生命線を確保する爲に召された自分達の生活ですが、非番の時には、時折

りました。魚は鱈みたいな

魚が實によくかゝります。圖體はでかいですが、釣られて抵抗もせずそのまゝズボツとあがつてきます。銀鱈潑刺たる日本の魚釣りのピチ／＼した小気味よい觸感などは到底味ふことが出來ませんでした。まるでピンボケのアメリカの兵隊を釣るやうでした。こゝでとれる魚はすべて大きなものばかりです。一匹で四斗樽に一杯になるほどの人頭大の章魚入道もあつたし、足の先端に爪のついてゐる一疊敷位のオバケのやうな鳥賊もあつたし、三米程もあるピカピカ光る太刀魚もあつました。食つても大味であまりうまくありませんでした。昨晚はにぎり鮎を食べてゐる夢をみました。これ等は

でせう。

鮎は幅三米位の小川にもどんどんあがつてきました。ぐん／＼後から後からと押上げられるので、中には砂の上に押し上げられてはたばたはねてゐるものもありました。上つてくる鮎を棒でたたいたり、石を投げて殺して面白がつてゐる者もあつました。これらの夏にとつた鮎は土人の主食物で冬の食料にも乾鮎にして保存されます。

狐をとるにはワナは使はず、狐が魚を求めにやつてくる川のほとりの狐の道に穿を掘つて上部を雪でわかないやうに、隠して置くと、その穿に狐が落ち込んで、マンマととられて了ふのです。これからいよく本格的な

日と日が短かくなります。

晝といつても灰色の空がほのかに明るくなる位のものであとは再び眞暗の夜で濃霧と海鳴りと吹雪と海獸の鳴聲だけになつてしまひます。ツンドラの上に張られた天幕の露營生活です。寒さと濕氣とに苦しめられませんが祖國を思ふわれ／＼の赤き血潮は火のやうに燃えてゐます。一機たりとも敵は通さんぞの意氣のもとに張り切つて居ります。故國をはなれて四千キロ、雪まじりの突風の中に防寒服の裾に氷柱をたらし、足はぢつとしてゐると凍りつくので、絶えず足踏みをしながら嚴然と警備についてゐる兵士の姿を御想像下さい。でも頗る元氣ですから御安心下さい。



一家僧族

一家僧族といふ言葉は聞き慣れぬ言葉であるが、國體に準據した人生觀の上から、洵に意義のある言葉だと思はれる。戸籍法の實施によつて、この言葉が生まれ、戸籍法の實施によつてその實が擧らなかつたから耳遠いのである。

明治維新前お寺の住職は耶蘇教禁止令の實施上、宗門改めといふ民政の一部を引受けて、町村の檀家の宗門帳に證印したり、檀家が他郷へ旅行する時には、自坊の檀家で耶蘇教徒でないといふ證明書を造つたりしたもので、官吏に準ぜられたものであつた、隨つて明治初年にはお寺の住職は士族を以て取扱はれた。

僧尼は出家といひ世捨て人であるので、寺には山號

がついて居る。親子夫婦の人倫を絶つた生活であり、

個人の靈魂の救済を目的とする教法を説くものであるが、我が國は家族國家の國體であるから、眞宗のやうに住職世襲のお寺も起るやうになつた。けれども僧尼は得度によつて俗籍を離れるものであるから、たとひ公家や武家の出身で、元は苗字のあつた者でも、苗字を棄てた。維新前は寺院の住職は寺院號を苗字同様に唱へたものであつた。住職以外の僧尼は寺内の職務のないものは單に法名だけで、百姓町人同様苗字を稱へることは無かつた。然るに明治四年統一的戸籍法が全國に布かれるやうになつて、從來特別の取扱になつて居た僧侶が一樣に戸籍に載せられるやうになり、百姓町人にも苗字を附けられるやうになつた。その時僧侶の苗字を如何にすべきかといふ問題が起つた。今増上寺に保存されてゐる「教院一件記」といふに明治五年月日不詳の苗字案といふがある。夫に一家僧族といふ

大 倉 邦 彦 著									
神典解說上卷	神典序說 <small>日本精神叢說第三集</small>	神典索引 <small>(内容見本進呈)</small>	神典 <small>三五判</small>	産靈の産業 <small>むすび</small>	大東亞建設と教養	隨想飛石	日本産業道	勤勞教育の理論と方法 <small>宗教的行としての集團勤行</small>	處世信念
送料 定價 菊判 三・五〇 五三二頁 三〇	送料 定價 菊判 一・二〇 二四四頁 二〇	送料 定價 菊判 一・七〇 三九六頁 二〇	送料 定價 菊判 一・二六〇頁 四・五〇〇	送料 定價 B六判 一・五〇頁 二・七〇頁 一・五〇	送料 定價 B六判 一・八二頁 三・一二頁 一・五〇	送料 定價 四六判 一・六〇頁 三・七〇頁 一・五〇	送料 定價 四六判 二・〇〇頁 三・三三頁 二・〇〇	送料 定價 四六判 一・三八頁 二・一八頁 一・五〇	送料 定價 四六判 一・八〇頁 一・九〇頁 一・五〇
躬行叢書 第一生 活 行	大倉邦彦監修 月刊修養 躬行	行の教育(資料篇)	大祓講義	行の佛敎 <small>日本精神叢說第五集</small>	護國佛敎 <small>日本精神叢說第四集</small>	日本精神叢說第二集	日本精神叢說第一集	祭政一致と臣民道	神典解說下卷 <small>品切</small>
送料 定價 B六判 一・二五頁 〇・八〇	送料 定價 B六判 一・一六頁 一・六〇頁 六十錢 (送料共)	送料 定價 新四六判 一・〇八頁 〇・七〇頁 八	送料 定價 菊判 一・五〇頁 一・五〇頁 二〇	送料 定價 菊判 一・二〇頁 一・二〇頁 二〇	送料 定價 菊判 二・四六頁 一・二〇頁 二〇	送料 定價 菊判 三・三六頁 一・五〇頁 二〇	送料 定價 菊判 二・九二頁 一・五〇頁 二〇	送料 定價 菊判 三・五〇頁 三・〇〇頁 三〇	送料 定價 菊判 四・九五頁 三・五〇頁 三〇
大 倉 精 神 文 化 研 究 所 刊 行 書 目									

規格 B 6 判